



(2) 名前のない新聞 No.210 / 2019年3・4月号

→猪風来美術館中庭の縄文小屋（竪穴式住居）で話す猪風来さん。中は意外と広く、真ん中の床にいろいろがあつて、入り口が開いていても寒くなかつた。2018.12



ことわり 自然の理を感受し、それに合わせて 生きる縄文の心を今に！

作陶WSや野焼き祭りなどで縄文の心を伝える猪風来美術館館長

いふうらい
猪風来さん

縄文ブームが広がり、海外でも縄文への関心が高まっている。21世紀に入っても空々しいオリンピックや万博のかけ声ばかりで、戦争のきな臭いにおいさえはじめ閉塞感がたちはだかる今日、1万年以上も戦争がなく人々が平和に共存していた縄文時代に新しい生き方のヒントを求める人が多いのかもしれない。

そこで日本で唯一の現代縄文美術館を主宰する猪風来さんを岡山県新見市の山里に訪ね、中庭につくられた竪穴式住居のいろりを囲みながらお話をきかせてもらった。穴居が完成した2017年には半年間ここに寝泊まりして冬越ししたという。縄文土器を昇華した新たなアート作品を創作する縄文造形家の猪風来さんと、奥さんでタペストリー作家の村上よしこさんのお話に耳を傾けてみよう。(あ)

■イノシシ年生まれの風来坊

——猪風来という名前の謂われは？

●私はイノシシ年生まれなんです。で、根が風来坊なもので、それで“坊”をとって猪風来と名乗ったんです。まあ縄文人名ということですね。縄文時代のイノシシというものは大切な存在で、土器の突起のところにイノシシがたくさん出てくるんです。一つの精霊神の象徴というか、神的な存在というか、そういう重要なものの一つということで、イノシシがたくさん造形されているんです。そういう意味では縄文の感覚に一番合った名前なのかなと思ってイノシシを名乗りました。

——いつ頃から名乗られてるんですか？

●縄文造形家として初個展（1984年「猪風来の現代縄文土器展」）を丸木美術館の企画でやっていただいたんです。この初個展は35年ほど前のことですが、日本ではじめての縄文の野焼き技法による現代縄文作品展をやったんです。これがたぶん縄文作家としては日本で初めての発表だったと思います。その時以来、名乗っています。

今回、取材に応じようと思ったのは、まず今やってる縄文土鍋展。縄文の流儀の造形を、現代の最先端技法も入れ、現代のガスコンロでも使用可能なようにつくって発表しています。これは縄文の心を現代に蘇らせるための、一つの芸術的アプローチですけども、これをアピールしたいというのが一つ。

もう一つは2019年3月に一ヶ月間アメリカに招待されています。コロラド州ボルダール市にポッターラボという市の陶芸館があるんですが、そこで縄文野焼きと縄文ワークショップを実施してほしいと招待されているんです。これは縄文の野焼きの炎がアメリカに立ち上る最初の出来事になると思います。縄文の心と技が世界に広まっていく前兆なので、日本の方々にもしっかりアピールしなければならなかったわけですね。

私が縄文を始めた40年前には私が美術展に作品を出品しても、アーティストたちの評価は、「割れ物、ゲテモノ、汚いもの」という評価でした。縄文というのは野蛮な連中のものであって、鑑賞すべき対象でもなく、美として取り扱うのものはばかれるというような反応です。見たとたんに、「おい、これ汚えな」から始まるという。岡本太郎が、縄文の美は世界に誇れる美だといくら主張しても、巷のアーティストたちはそういう評だったんです。

縄文の道に入ってからもう40年たって、縄文が評価される時代がやっと来たんだなというところですね。ここ5年前後の社会現象です。5年ないし3年くらいで急激な縄文に対する注目が全国的にも世界的にも高まってきたるなーというかんじです。よみがえった現代の縄文芸術を世界に広めたいですね。

——どうして縄文が今これほど注目されるようになってきたんでしょうか？

●一つは縄文の実態が考古学的な成果によって非常にはっきりと提示されるようになってきたということがあります。そしてそれがインターネットなどを媒体にして世界に拡散していくことで、情報が近しく提供されたということがまずありますね。それともう一つは、世界人類史の持っている文明を基礎にする社会が閉塞し、目新しいものをいくら提供しても、生き生きした何かを提案することがもはやできないという閉塞感があります。そういう中で、人類が営んできた文化のルーツというか根幹のところに興味がある。いったい自分たちはどのように生きてきて、どのようなことを考えてきたのか。その心はどういうものだったのか。それは皆さんが非常に興味があることで注目してると思います。で、人類が文化的なルーツとして全人類史的にひもといてみるとすれば、重要なキープポイントはヨーロッパにおける洞窟壁画の文化と、縄文の土器・土偶の文化です。

今の文明はこの地球を破壊してしまうほ

どの力を持っているわけですが、人類の不安や問題点を解決する力としては作動していませんからね。そういう意味で人々はこの大地の上でどう生きていくのかということを実際に考え始めたんだらうと。だから縄文というものに興味を抱かざるを得ない。40年前とはまったく真逆の評価ををしはじめたんです。この流れは変わらないと思



↑美術館の中庭につくられた竪穴式住居。撮影：2018.4.29



ます。人類は新しい美を見つけないし、縄文の心を知りたがっているんです。だからアメリカのボルダー市も我々を招待するんです。縄文は偉大な芸術ですから。

■縄文のこころ

その心というのは、一言で言えば、この縦穴住居、この空間と全く同じです。つまり大地に根ざして、生命原理思考で考えるという、そういう考えかたです。大地と心を結んでいるんです。大地はすべて母なる大地という観念でした。つまりこの世の全てのいのちは大地が産みだした、この地球が産みだしたんです。科学は後追いついていま実証していますけれども、我々人類もまた獣や虫や鳥や魚も全てこの大地が産みだしたんです。だから母なる大地という観念は実に普遍的なんです。それを体現して縄文人は暮らしていたんです。現代の“文明の知の体系”とは全く違う“縄文の知の体系”があったんです。

大地に根ざすということ、そして自然理合の精神世界であるということ。自然の理（ことわり）に合わせて生きる。自然の理を知り尽くして、合わせて生きる。そういう生き方だったということです。狩猟採集を基本とする生き方はそういう生き方なんです。そこに思想と哲学があります。現代人が知らない、感受することができないほどの根源的な知識なんです。それが縄文土器を生みだしたし、縄文人の1万2000年にわたる暮らしがあったということです。

人類発祥のアフリカにおいて一番古い土器は8000年前です。文明発祥の地のメソポタミアでは9000年前なんです。またヨーロッパで一番古い土器は8000年前です。そして日本の一番古い土器は1万6500年前です。これは最新の放射性炭素年代測定ではっきりしています。つまり日本を含む東アジアから人類史上はじめての土器文化が発祥したんです。その土器文化を独自に発展させたのが縄文文化です。つまり世界の文化史の画期的な営みを紡いできたのが縄文時代だということです。自然の理に合わせて生きる大自然理合の精神世界をもって縄文人は生きていたんですが、現代人はそういう自然の理を体感し熟知し感受する力を喪失して、そういう能力が格段に退化してきています。いま文明人は退化の極地にあります。すべてをITやコンピューターに委ねなければならないところへ来てしまいましたね。今の文明社会が、この地球上で生きる大切な知を完全に喪失しながら退化しつつ生きていくという時代に突入したんじゃないかと。

これは非常に危険なことです。一方では地球を何度も破壊できるだけの兵器を持っています。そして人々の心は大地から離れてしまった。ますます父なる天空に向かって行っ



むらかみよしこさんに聞く

北海道暮しから学んだ縄文スピリット

*猪風来さんと一緒に北海道で20年ほど暮らした。

●北海道での約20年の暮らしは最高でした。存分に大自然の豊かな恵みと美しさに触れることができたこと、そしてアイヌ民族の文化に学ぶことで縄文への理解が深められたからです。その頃アイヌモシリを奪われ、差別や偏見を受け、言葉や祭りや文化が失われかけていたアイヌの人々が、民族復権の声を上げ始めていました。今は亡き砂澤ピッキさんや萱野茂さん、チカップ美恵子さんたちも元気で活動していました。岩手生まれの私は、東北縄文につながるエミシの系譜だろうと思っていますが、自分がすでに失ったルーツの文化をもつアイヌの人々の文化復興の運動はとても興味があり、縄文スピリットへ接近するヒントにもなりました。北の大地は、野山の山菜や野草、川や海の幸が豊かで、季節ごとにたっぷりの食べものを頂きました。山菜・キノコの塩蔵・魚の干物など冬の間の保存食も作りました。自然からの恵みと畑での収穫、そして村の漁師の手伝いに行き、魚をたくさんいただきました。食べものは親子5人で食べきれないほどにあって、しかもとても美味しいものばかりでした。アイヌの人達が持つ自然に対する姿勢とか暮らしを見たり体験したり、自分の生活の中で自然からいただいて、それを皆で食べて生きるという生き方をしているうちに、縄文というものの内実がなんとなく感じられてきました。

*羊毛が大量に手に入る生活だったので、糸に紡いで織るようになった。

●北海道では羊をいっぱい飼っているの、春先に毛刈りをするので、安価でほいだけ手に入りました。自分が一年間に糸にできるくらいの毛を分けてもらって、まずゴミをとって洗って、それをまた漉いて、糸にして染めて、編んでという工程は手間のかかることなんですけど、でもそれが向こうの生活の中では、半年くらい雪の中なので、とても楽しい作業でした。で、糸を作る作業をしてから、いろいろ自分の創作の意欲が湧いてきて、最初は身にまとうものだけだったんですけど、そのうち表現としての織物というところで、タペストリーを作り始めたんです。その時参考になったのが、アイヌの人達のアイヌ文様の刺繍だったんです。チカップさんや小川早苗さんたちは美しい文様の入ったアイヌの衣服の復元やオリジナル作品を作り始めていて、とても刺激を受けました。その文様の世界というのは彼女らの世界観でもあるし、自然やいのちに対する敬意でもあるし、文様で表現する世界があるんだなっていうのを知って、あ、縄文もそうなんだと、これを表現すればいいのかなと思って、それで縄文を織り出す、それから自然のいのちが紡ぎ出す世界みたいなものを表現したらいいなと思って作り始めたのが始まりです。

まわりにすごく植物が多かったので、まあ食べるものにもするけど染めるものにも使って、たくさんの種類の色糸ができて、それがいのちを表現する文様や図柄になっていくのがもう楽しくて(笑)。繁殖力が強くてわーっと出るようなのを刈り取ってきて鍋に入れて、そういう繁殖力の強いものって色も堅牢なんです。で、いろんなのをめったやたらと染めてみると、ぼけた色もあるしすごくはっきりした色もあるしいろいろなんだけど、でもタペストリーになるとそれぞれが役割を果たしてくれるので、ふつうでいうとあんまりきれいな色じゃないなっていうものもあるんだけど、それはそれで生きる場所があるんです。私のタペストリーはいろんな色を使っているんだけど、草木がそれぞれのいのちの色を持っているというのが実感です。

*タペストリー作品を手作り絵本にもしている。

●大きいタペストリーを作る1年間は、そのテーマのことを思い続けていて、胸の内から出てくる言葉を集めて手作り絵本を作ります。タペストリーの作品と絵本で一对の表現としてとらえているんです。絵本も手作りなので、そんなに出版するみたいに大量生産じゃないので限られてるんですけど、売れたらまた作るみたいなかんじで作ってます。届けられる方はあんまり多くないかもしれないけど、今はこのペースが自分には合っています。

岡山に来た当初は、この土地の自然に息づくいのちをテーマに作品をつくりましたが、縄文をテーマにした「いのちの祝祭」や「わたちの縄文」のタペストリーもできました。母なる大地とつながり生命を抱く縄文土器を作っていたわたちの精神世界こそ縄文スピリットの真髄だと思います。縄文に魅せられた女性たちがここに集い、土器や土偶作り・野焼きを通して縄文に学び、2016年の春「わたちの縄文野焼き」の挑戦がなされました。これはみんなが思う以上にとても素晴らしいすごいことだったんです。いのち満ちる縄文の世界をわたちの手に取り戻すことでしたから。



むらかみよしこ作「いのち満ちる☆わたちの縄文」250×255cm (手紡ぎ・草木染め・手織り作品) ↓



(4) 名前のない新聞 No.210 / 2019年3・4月号

てる。

私は縄文の心を知りたいと思って北海道に移住して約20年暮らしたんです。縄文の暮らしから縄文の土器は生まれてますから、その心を知ろうと思えば縄文人と同じ暮らしをしてみたら一番近道なんです。いろんな文献を読んだって何のたしにもなりません。縄文人と同じように暮らし、同じ感性を復活させ、その心のありようを縄文暮らしの中でまさぐっていけば、回答はあります。自然が文明によって窒息しているとは言っても、自然はのこってますから、日本列島はあるわけですから、そういう自然の中に入って縄文暮らしをすれば、たちどころに体感できますし、わかってきます。そして大量に土器があるわけです。土器の文様は心の言葉であり、魂の言葉なんです。土器の造形や文様は縄文人達の心を表現したものですから、そこに心が現れているわけです。だから縄文土器を作ってみればわかるんです。縄文暮らしをして、縄文土器をつくって、その土器で煮炊きして食って暮らせば、その心に接近できるし、真髄をつかむことができるんです。文献にはどこにも書いていませんから。

大地がすべてものを生み出したということは、万物は同根だということです。鳥も虫も魚も、我々と同根なんです。ということは、いのちは等価なんです。万物は同根であり、等価ないのちを持っていると言えます。縄文土器の文様は装飾ではありません。それは入魂文様なんです。その魂とは何かというと、喰らういのち達、等価ないのち達を喰らわねば生きていけないという心の葛藤があったんです。そのため、そのいのちにふさわしい尊厳ある器でなければ縄文人達は喰えなかったんです。現代人みたいに何の入魂もされていない鍋とか釜で炊いて喰らうということは、等価ないのち達に対して無礼極まりない。しかもその喰らってしまういのち達の再生を願うんです。魂送りをして、生命の循環が途切れぬよう大地にもう一度再生してくださいと祈るわけです。尊厳あるいのちの再生を願う呪術、祈りをほどこした土器、しかもその作者が自分のありったけの心を入魂した、そういう尊厳ある器でなければならぬ、ということで縄文土器の文様造形は1万2000年も続きます。

そして縄文土器を構成している要素、キーポイントは勾玉と縄の文様です。勾玉というのは胎芽の形なんです。生きとし生けるものがいのちを宿し胎児となる前の最初の段階の形で、初めていのちの形をとった時の、いのちの根源の形なんです。この胎芽の形は、地球上のいきものぜんぶ同じなんです。魚も虫も鳥も人間も、すべて同じ形から出発するんです。

そして人間がそのいのちをつないで

2018年春の縄文野焼き祭り→



いく、いのちを守る根源の形が縄なんです。例えばこの竪穴住居は1000カ所くらい縄で結ぶんです。草と木を結んでできるんです。縄がないとできないんです。服もできないし、狩猟採集の道具も作れないんです。すべて縄からできるんです。人類の旧石器時代とか新石器時代、縄文時代というのは縄文化なんです。石器文化だとか木器文化だとか土器文化だというふうに分ける方法もありますが、要するに縄の文化なんです。人の生命を守る力の根源が縄なんです。

土器というのは粘土でつくるでしょう。これは母の身体の一部ですよ。母なる大地の肉なんです。だから当然、土の化身であり、大地の化身なんです。もう単純明快なんです、土器の性格は。だから土器は母なる大地の持っている意味を体現してしまうんです。大地は万物のいのちを生みだして繰り返し再生していくので、いのちの再生のパワーを当然、化身として持つわけです。だから文様もそうなるんです。いのちを再生していくパワーに満ちた造形になっていくんです。いのちが派生し胎動し出産していくという、いのちを生みだしていくサイクルを縄文人は土器体に文様化していったんです。

■縄文土器の作者は女性

土器は土でつくったんだから、大地をイメ



ージして作ったんです。そして大地が持っている普遍的な意味合いを体現するんです。縄文人は大地の恵み抜きには生きられないんですから、しかもそれを大地の体自身をもって作った土器が、食べやすく食料に転換してくれるんです。スープ状にできるし、そうすると赤子でもすすれるわけです。つまり第二の乳に転換できたわけです。だから縄文早期のものは土器の先に乳首がついてるんです。要するに乳房体に作ってあるんですよ。そして縄文草創期の土器はいのちの入れ物状態に作ってあるんです。つまり胎盤ですよ。その形に意味があるんです。縄文人が土器作りにおいてイメージしていたものは「大地」のイメージと「乳房・胎盤・子宮」をイメージし、「万物の生命がこの世にあふれますように！」と祈ったんです。縄文の女性たちの価値観、生き方、哲学があります。作者は縄文の女性たちです。だからああいう形を生み出さざるをえなかったんですよ。そうでなければ生きられないので切実だったんです。自然の理に合わせるというのが自分たちのいのちを育てていく鍵だったわけですから、土器を創るのもいのちがけだったんです。この縄文土器は縄文人たちの思い願ひ祈り、すなわち思想哲学を表現するために「層と方位と面」による構造表現法を用いています。その構造の中に対象性、すなわち静態形と非対象性すなわち動態形を合一させた文様造形で世界観を表現し、縄文様式美を確立しています。これは〈多観点、多時間、多次元〉の造形なのです。これは現代の表現法を超える大変に高次元な構造表現法なのです。

それを弥生時代から転換したんです。土器は無文様となった。そして大地を占有し、この区画は麦だけ米だけ生みだしなさいと支配したんです。それが農耕なんです。占有から所有になり、領地になったんです。

そういうふうには大地に対する観念がまるで転換してしまったんです。それは弥生時代に始まって古墳時代、平安時代へと、大転換が続きます。そして平安期に大地に対する思想的な価値観が完全に変わってしまうんです。それが記紀神話です。記紀神話は、縄文時代のことを含んで書かれた神話ではありませんし、縄文とは無関係のものです。これは弥生から平安時代の神話ですね。記紀神話では男の神々が4女神を抹殺します。女神たちは男神においしいものを食べさせようと差し出すんですが、それが汚いと言って女神を長剣で殺します。そして殺した死体から五穀が生えるんです。その五穀はおいしくてきれいだと言われ価値転換するんです。大地は汚いものであり、大地を切り刻み耕し、そこを支配すれば五穀が生えたと。このように支配者にとって都合のいいように男性原理神話をつくりあげてしまうのです。縄文の女性原理神話が

←左奥の2階建て建物が猪風来美術館



ら男性原理の神話に転換したんです。

——それは朝鮮半島や大陸から来た弥生系の人たちによってもたらされたものですね？

●それもありますけれども、それだけではありません。その時代に生きていた縄文の男性原理の集団が自らそれを選んだということもあるんです。そこが非常に悔しくて罪なところ。大陸では一足先に男性原理社会に転換しましたが、海を渡る技術が発展しましたから、日本列島を異なる価値観で支配するパワーが大陸から渡れるようになったわけで、それが流入してきたのです。

弥生遺跡は九州で最初に登場しますが、田んぼができて集落ができて、そこで初めて石剣が出るんです。これは人殺し専用の武器です。縄文時代にも弓があったし、それが人殺しに転用されることはあったかもしれませんが、殺人専用の武器はなかったんです。つまり男性原理社会になり、大地を支配し、そこから得られた食料を守るために弥生共同体をつくって武器が登場するわけです。その石剣が銅剣になり鉄剣になります。古代戦国時代となったのです。

■土器から学び、縄文暮らしをする



↑野焼きの火が落ち、土器が姿を現してきたところ
自然を征服し大地を征服し、すべてを我が物顔に支配するというふうで大転換してしまっただけです。その前は自然の理にすべて合わせて生きるという生き方が1万2000年間も続いていたんです。

ですから世界に残っている男性原理の神話を寄せ集めて縄文を探ろうとする学問的研究はほとんど全て間違っています。そんなことやってわかるわけがないんです。世界に残っている女性原理の文化だけを集めて読み解こうとすれば、わかってきます。でもそれよりも早く、土器があるんだから、土器に学ばばいいんです。土器には心が書いてあるんです。だから土器を読み解けばいいんです。今の学者の欠点は何かと言えば、自ら作ってみたい、使ってみない、暮らしてみない。だからわからないんです。縄文暮らしをして

自分で作ってみる、自分で使ってみる、自分でそのように生きてみる。それをすればたちどころにわかりますよ。それをしないで縄文論を語っても縄文の真髄にはぜんぜん到達できません。

文明力は何に注がなければならないかという、文明が吐きだしてしまう害毒を自ら除去するために全ての能力を注ぎ込むべきなんです。それが今日の科学の仕事であり文明者の仕事ですよ。世界を征服するための暴力的装置のために使うべきじゃないんです。使い方を誤ってるね。

根本は大地の思想を復活させることです。現代人は大地感を完全に失ってます。生活が土から切り離されて、大地を知らず、火さえ知らないというふうになってきてますね。仮想空間だけが広がっているという。情報過多で自ら判断せずコンピュータまかせにしてしまうというのは進化というんでしょうか。間違いなく退化ですよ。そういう時代にあってもう一度大地に根ざしたいのちの原理思考をしっかりと持つべきだと思います。それは縄文に全て答えがあると思ってます。そして私達の現代縄文アートが未来を照らすでしょう。

【編集部後記】

・自然の理を感受し体感し、それに合わせて生きる縄文の心を熱く語っていた猪風来さん。原発事故に象徴されるような人間中心の生き方・文明社会が行き詰まってきたいま、注目すべき指針となるように感じた。

・311以降、放射能の影響を受けないような土地と暮らしを求め、たくさんの人たちが東北や関東から西に移住する大移住が起こった。そして移住先では農業など自然に近い暮らしを選んだり試す人が多いが、それは縄文の心に通じるもので、今後、人類や地球が生き延びていくとしたら、自然と切り離されない方向に進んでいくしかないのではないかと感じる。

・本誌では今後もそういった生き方をしている人達に注目し、紙面で紹介していきたいと思う。(あ)

INFORMATION

猪風来美術館

岡山県 新見市法曾 609 (〒719-2552)
0867-75-2444
<http://www.ifurai.jp/> ↓QRコード
mail@ifurai.jp

* 展覧会、陶芸教室や野焼き祭り、ショップ等の情報はサイトに詳しく書かれていますのでご覧ください。



インタビューを振り返って

「よしこさんってすげえなあ！猪風来さんに付いて行って北海道の厳しい自然のなかで縄文暮らしをしていたんだなあ。」インタビューでお話を伺うまでわたしはよしこさんのことをそう思っていました。でもそれは、勘違いでした。何が勘違いだったかという「付いて行って」というところについてです。

インタビューを読んでみなさんもおわかりのとおり、よしこさんは猪風来さんに「付いていった」のではないのです。よしこさんもまた北海道の土地に縁あり、自らの思いで猪風来さんとともに北海道に移り、その「豊穡なる」恵みを喜んで受け取りながら、暮らしと創作をひらいておられた。このことはお話を聴き進めるうちに本当にはっきりと、当然のこととして感じるようになりました。

インタビューのあと、この「すげえなあ！」のくだりをよしこさんと猪風来さんにあえて投げかけてみると、おふたりは同時に「それこそが、男性原理の考え方なんだよ」と、言いながら小さく首を横に振っていました。

「女性は男性に付いていくもの」という考えかた、それもまた男性原理の世の中を生きるわたしの思い込みだったのだと考えさせられます。このようにしてわたしたちの思いやおこないの中に、知らず知らずのうちに男性原理が表れている場面が他にはないといえるだろうか。

また、猪風来さんがインタビューの最後、静かに放ったことばが深く胸に響いて忘れられません。

「ともすれば、もう手遅れかもしれない。」

人間の歴史は今、およそ3000年ぶりに男性原理の支配構造や人の在り方から、いのちの原理にもとづき大地とつながる女性原理の在り方を取り戻してゆく「転換点」を迎えているということ。そのなかで自身が生を与えられていることの意味。そして、縄文暮らしと土器の声から体得した縄文のころについて熱く語った猪風来さんが、今地球の様々なところで起きている出来事をふまえて、「転換」するにはあるいはもう手遅れかもしれない、と最後にそう言ったのです。

このことばの衝撃に、わたしは一瞬固まってしまいました。そして、それまでのインタビューでわたし達に語りかけてきた猪風来さんの想いとことばが、更に彩りと体温のような実感を伴ってわたしの胸を強く揺さぶってくるのを感じました。それがなぜなのか、うまく言葉にはできずにいますが、おふたりのメッセージに胸を揺さぶられるのはきっと、わたしだけではないと思います。 蝸 (さなぎ)

